

Patent

Dec. 7, 1982

Des. 267,147

FIG. 1.

FIG. 2.



カリフォルニアのオレンジ郡に広がるフットヒルランチの丘の上に異彩を放つオークリーの本社がある。これだけを見ても常識にとらわれない精神の持ち主がいることがわかる。この建物は単に人を驚かすためだけの目的でこの姿になったわけではない。研究開発から製造まで一貫したモノづくりがここで進められている。ショップもあればミュージアムもそろいマーケティング活動もここで進められる。

FIG. 3.

FIG. 4.



5.

FIG. 6.

107 Photos/Courtesy of Oakley

【オークリー物語】

OAKLEY

現在オークリーを率いるコリン・バーデン(下)の前職は建築家。創始者ジャナードと共にこの本社建設に携わった。

グレートブランド物語

Great Brand Story

第22回：文と構成／河村喜代子

オークリーは1975年に始まっている。創設から約35年が過ぎたところである。スタートのころから記憶している人間が、おおぜいいておかしくない時間の長さだ。最初にオークリーを始めたのはジム・ジャナードという人物である。モトクロス用のグリップを自作して、ホンダのシビックに積んでレース会場を回っては売り歩いたの

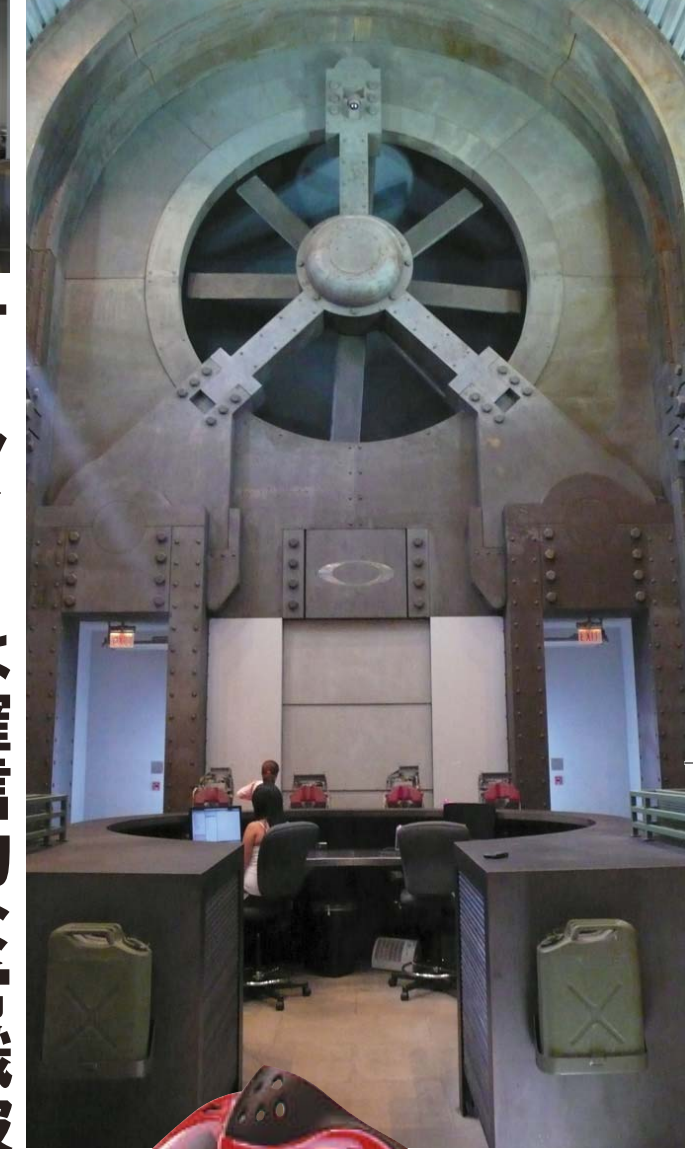
だという。その現物だってちゃんと残っている。現在、ロサンゼルスの中核地帯にあるフットヒルランチの丘に建つオークリー本社のミュージアムでビンスポットをあてられている。次ページにある図面は当時のグリップのデザイン特許だ。残っているのはそれだけではない。自分が目指すグリップのためにジャナードがつくりだした素材「アンオブターニウム

は、現在のオークリーでもそのかたちを変えて健在だ。汗でグリップが滑りやすくなるのを防ぐために、水分を含むとグリップ力を増すという素材はアイウェアにも有用だからだ。モトクロスという熱狂的だが狭い世界中で、しかもそのグリップという手のひらに隠れてしまう地味なモノから始まったオークリーの名前は、今

や広く世界中に知れ渡るまでになっている。何者でもない者がトップの地位に駆け上がるアメリカの夢は、まだ生きていた。ただし20世紀末に生まれ、21世紀に大きく夢を飛躍させた原動力は100年前の成功者たちとは違っている。かつての支えは刻苦勉励の精神だったが、オークリーにあるのは常識破りの革新的スピリットである。

サンガラスにとどまらずアイウェアで確固とした立場を築きながらも常識にからめ取られない革新性がある。

明日、彼らは何を見せようとするのか。オークリーは確信的な常識破りの精神から始まり、つねにトップを走りつづける。



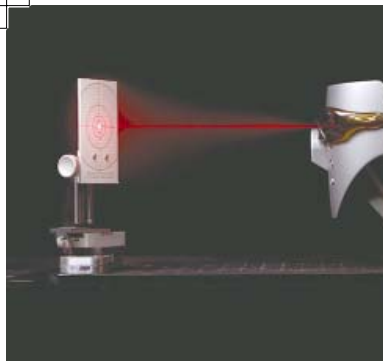
O Frame MX
モトクロス用
ゴーグル



オークリーの原点はモトクロス用グリップにある。隣ページの特許図面にある曲線を多用したデザインがまず生まれ、左にあるグリップは現在もかたちを変えて素材が利用されている。次にゴーグルを手がけ、現在のアイウェアへとつながる。

1975年のグリップと
1984年のアイシールド





光拡散力、不均質な分光を調べるテストで優れた結果を示すオークリーのレンズ。

オークリーが人の注目を集める理由は、第一がそのスタイルにあるのはまちがいない。右にある製品がいい例だ。髪の毛はヘビ、その顔を見る者を石に変えてしまうというギリシャ神話のメデューサ。その名前で呼ばれるゴーグルが2002年に発表されている。ヘビを連想させるレザーのかわりものまでつくったとは念が入っている。

Photo/Craig Saruwatari



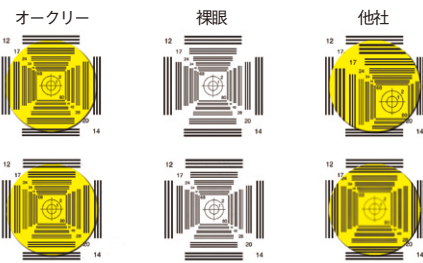
ターミネーターを思わせる左のメタルヘッドがかけているレッドレンズがはまっているモデルは、ラック、レッド以外にもゴールド、アイス、ファイヤーなどのカラーがある。それぞれの可視光線透過率が異なる。状況にふさわしいものを選択すればいいというわけだ。

オークリーはスタイルだと断言してしまったが、アイウェアはスタイルだけでは成立しない。レンズの性能がついてこなければ、競争の激しい分野で、だれもオークリーの動向をうかがったり警戒をすわけがない。放っておけばやがて消えていく。けれどオークリーは、レンズがいいという定評がすでにできてしまっている。だからこよけいデザインが驚異の目を集めるのだ。驚きとは、かたちを変えたりスペクトルの一種のようなものだ。

ミラー効果というレンズ技術はすでに触れた。それ以外にレンズの基本



右上)メタルのスクアルに装着されているモデルは1999年発表のジュリエット。右)素早いレンズ交換を実現させたジョウボーン、2009年発表のモデル。左)Xスクエアード2009年12月の最新モデル。



上はレンズのプリズム・光拡散テスト、下は解像度を示す。上下とも左端がオークリーの成績。中心を保ち、クリアだ。

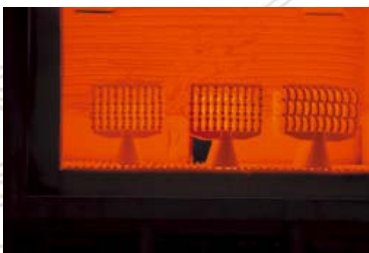
性能を見る特徴は、光拡散力、不均質な分光、屈折力、非点収差、解像度、UVプロテクションなどを、目を保護するためのさまざまな力によって計られる。それらについてはアメリカの規格協会ANSIが提唱するアイウェア工業規格をクリアしているだけでなく、写真で示してある耐衝撃性などとともに、その規格基準を上回る結果を残している。どんなに時代が変化しても、アイウェアは道具であり、原点は機能にある。それが確立していないと残れない。またリーディングブランドとなった者には、必ずフオロワーが出てくる。当事者には迷惑な話だろうか、これは避けられない。トップは目立つからだ。追隨者を置き去りにしていくパワーがあつて、トップの地位が用意されているということだ。



右から左へ) Oフレームスノー。初のオブサルミックフレーム、ダブルOワイヤー。世界初のデジタルオーディオアイウェアのサンプル、ジュリエット。そして度付きレンズも展開している。



オークリーではフレーム製造も自社で行う。なかでも独自開発によるXメタルは特殊金属化合物を使用するだけに激しい化学変化を伴い、高度な加工技術が要求される。厳しい製造管理下において精密な作業を進めるために自社工場が生産することが正しい製品づくりのために欠かせない。



軽量でありながら同時に強度を発揮するXメタルシリーズの製造と加工は最先端のテクノロジーと職人技を極めた冶金術の領域を同時にカバーする技術が必要になる。

上は油分による汚れをつきにくくしたレンズ機能で、オレオフォビックと呼ばれるもの。これにより軽く拭えばすぐにきれいになる。下はハイドロフォビックの機能を示す。レンズ表面に水滴がたまるのを防ぎたとえ汗や雨がレンズに付いても跡を残さず粒状になって流れていく。天候やあるいは体側に左右されずにクリアな視界を確保できる。オークリーのレンズにはこのふたつの機能が付いている。



Production Scene Photos/Hirotoishi Hanada (WPP)

耐高速衝撃テストのようす。バイクを運転中、はねた小石が当たる場合などを想定し直径6.3mmの鋼鉄を使い、時速164kmでテストを実施。上のオークリーの製品は無傷のままだが、下の他社の製品はヒビが入っている。



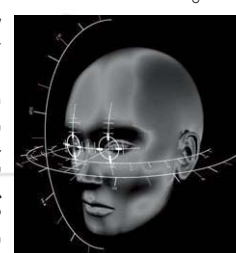
オークリーでは研究開発、デザイン、製造までひとつ屋根の下で行っている。そして完成品はここフットヒルランチから世界へ向け送り出される。今のアメリカ企業では非常に珍しい。



Photo/Craig Saruwatari

ジュリエットだ。これなどはオークリーのなかではおとなしい方だ。フレームは定番モデルとして人気が高い。レンズの色は、レッドのイリジウムをコーティングしてある。これでサンングラスのミラー効果を生んでいる。ちなみに、メデューサのレンズに施されているのはブラックイリジウムによるコーティングである。晴天時には優れた遮光力で目を保護する。もちろん視界は鮮明に保たれている。このメデューサモデル自体は、すでに製造が終了している。ミラー効果を出すためのイリジウムによるコーティングは、オークリーが誇るレンズ技術でありそのバリエーションは、ブ

彼らの技術が本物だから B-52の射出座席を並べた場所がマシンエイジの神殿に見える。



人間の眼は縦、横、奥行き、つまりX、Y、Zの各軸を統合してモノを見ている。オークリーは従来のレンズでは避けられない各軸のゆがみを光学的に排除しXYZオプティクスを完成させた。下はレンズの耐高圧衝撃テスト。500gの尖った物体を130cmの高さから落下させた状況を設定し耐衝撃力を調べる。



オークリーのアイウェアデザインで特徴的な部分がストレートなテンプルだ。



Photos/Courtesy of Oakley 108

を「実行した」という道が似合う。

ジム・ジャナードは、21世紀にアメリカの夢を実現させた数少ない人物だ。移動の足を愛車シビックから自家用飛行機に変えることになったのは、離れ小島に住むようになったためだ。インターネット嫌いは昔からだが、彼はもうめったに公の場に姿をあらわさないらしい。今は、デジタルカメラの新しいビジネスに携わっている。

フットヒルランチにも彼の姿はない。それにもかかわらず、ブレッドランナーの世界から抜け出てきたような要塞には、マッドサイエンティストであることを認めていた彼の気配が濃厚だ。普通であることを嫌ったスピリットがエコーのように充ち満ちている。それはB-52の爆撃機の射出座席が並んでいることをいっているのではない。戦車や、建物の真ん前に鎮座しているトビー・ド、魚雷のことをいっているのではない。そうした装置を、金のかかったおもちゃに見せるのを押しとどめている何かだ。その正体を見失わない限り、要塞は要塞でありつづけることができるはずだ。



トップアスリートのためにつくられたモデルからスタンダードモデルまで技術水準的にはオークリーのアイウェアはシームレスだ。だから楽しめる。そして自己表現の可能性はスカイ イズ リミット。

ジム・ジャナードそのものだった過激を楽しむことを知る。スピリットは遍在している。



オークリーの登場以来アイウェアを取り巻く世界が激変した。一度高くなった水準はもう後戻りできない。エッジを進む興奮を味わったらもう普通では満足できないのと同じだ。

Product Photos/Masakuni Miyasaka (WPP)
 ©オークリージャパン
 0120-009-146 <http://oakley.jp>



オークリーエリート
 タイムボムII
 OAKLEY ELITE
 TIME BOMB II

エリートコレクションはテクノロジーと同時に美を希求する。ベゼルは同コレクションで存在感を示すカーボンファイバー。自動巻き25石、一度の巻き上げで38時間駆動、28,800振動/時、10気圧生活防水。価格33万6000円



オークリーエリート ピットボス
 OAKLEY ELITE PIT BOSS

超軽量で耐久性に優れたオークリーの特許素材 O Matter (オーマター) とチタニウムのふたつの素材を組み合わせる。リム部分のT5ボルトは耐衝撃性能を担い、かつオークリーのアイウェアとしての個性を表現する。価格9万4500円



オークリーエリート Cシックスアルミニウム
 OAKLEY ELITE C SIX ALUMINUM

カーボンファイバーとアルミニウムというふたつの素材が独特の美しい輝きを放つ。一つひとつのパーツは職人の手によって組み合わせられ、ハンドポリッシュにより丁寧に磨きあげられている。価格21万円



オークリーエリート Cシックス
 OAKLEY ELITE C SIX

オークリーの精華ともいえる究極のコレクションとして誕生したオークリーエリートコレクションシリーズのトップモデル。カーボンファイバーをフレームにする難しい加工技術を駆使して実現。参考価格52万5000円 日本発売未定